

今年も早いものであと二ヶ月を切りました。本州以北ではすっかり紅葉も落ち、初雪の便りもちらほらで、なんとなく陽だまりが恋しくなる今日この頃です。

さて、去る十月十五日の日曜日、長崎市諏訪体育館柔道場で開催された第九回市民体育レクリエーション祭に北道場からも合計四組の演武を出しました。

参加の皆さん、また応援のため道場まで足を運んでくれた皆さん、たいへんご苦勞様でした。

そもそもこの祭は、長崎市民体育大会として戦後すぐの頃から開催されていたのですが、スポーツの大衆化やもつとスポーツを身近な健康づくりや

仲間づくりに役立てようとする趣旨から九年前に名称を変更したもので、以前から当日は合気道の演武も行われていたのです。

長崎市内外の方のために参考までに申し上げますと、「体育の日」はその六日前の十月九日で長崎市内外ではおそらくこの日を中心にして諸々の体育行事は行われている筈ですが、長崎はちょうど約四百年の歴史をもつ「おくんち」の開催日と重なっているため、約一週間遅れの開催となったものです。

開催の主管だった長崎道場の幹部や実行委員の皆さん、たいへんお疲れ様でした。特に、開催のプログラムづくりや記録ビデオ編集等に当たられた同道場の平野裕三さん、ご苦勞様でした。

かつて同じように諏訪

体育館でもにも稽古に汗を流した、稲佐の正龍館道場（上村道場長）や諫早市の多良見道場（宮原道場長）の方々だけでなく、今回は氣和会からも三組の迫力ある演武が出され、全員和氣あいあいのうちに合計三十三組の演武が怪我也もなく終了できております。

北道場からは前述のように四組の演武を出しましたが、特に浜田道場長（七段）による五人投げは、投げの早さもさることながら高・中学校生の桑原・田中両君も一般の三名に混じって遜色のない受け身を行い、日頃の練習の成果を発揮してくれました。



浜田七段の5人投げ

「指導者のあり方について」

一般的に指導者とは、目的に向かって教え導くことと言われており、スポーツや武道でも指導者のあり方によって、その団体の雰囲気や表れるのである。

いい指導者や監督は、結果で判断され、そして優勝した後のインタビューや本の中では、「勝つことを目標に選手をいかに育てるか」ということである。つまり、勝つためには選手の個性を見出し、その長所を伸ばすことにより、チーム自体にも活気がつく」ということを必ずといっていいほど言っている。

このことは、当たり前であって絶対間違いではない。しかし、こうした話の裏には考えられないような厳しい教育や練習がある。

どんなに厳しい教育や練習であっても皆が続けられるのは、勝利という目標があるからこそである。

それはちょうど、険しい山ほど頂上に到達したときの喜びは感慨深いものであるのと同じような気持ちであろう。

指導者はそうした気持ちを、選手に体験させたい一念があるからこそ、時には、選手にはムチを打ったりするのである。

しかしそれは、勝利が求められている競技種目であって、仕事や学校が終わって趣味として行うスポーツにおいては、そこまで求めることは困難であって、一般的には気持ちいい汗をかき、年をとっても未永くできればそれだけで充分であって、また、試合という大会において偶然勝てればそれはおまけである。

毎年、春や秋に様々なイベントが各地で行われているが、参加者はそうした気持ちで汗をかいているのであろう。

そしてそのことが、仕事や勉強がより順調に行くことにも繋がるし、また、自分自身の人生を豊かに生きるための秘訣である。趣味を持ち、そしてその中で指導者が、その団体の会員に与える影響ははかり知れないのである。

さて、そこで合気道の指導者の場合において考えてみた時に、そうしたことを充分理解して皆指導していると思うが、合気道の目標が「合気道の精神」であり、しかも目に見えないものであるため、指導者の考え方によって様々な方向へと発展してしまう。

このことは、当然であって、仕方がなく、それぞれの道場の色が出ていいと

思われるが、ただ会員のことと砂泊先生の教えを真剣に考えていなければ、その指導者の色だけになっってしまうだろう。

「合気道で悟る」の中に「一般に稽古者が増えてきたのは、昭和三十年代に入ってからである。その頃から道場に出られる翁は、稽古の中で主に精神的な話をされて、体技は従にならなければならないのである。

稽古に来た者の多くは話しよりも体技を欲して、翁の稽古よりも若い指導員の稽古時に多く流れているのである」と記されている。また、砂泊先生は、体技だけでは必ず行き詰まる」とまで言うておられる。

このことは、毎月の有段者交流研修会で砂泊先生が直接言われていることであるし、また、本部機関誌「万生の泉」にもよく記されている。

要するに、我々は、砂泊先生から植芝先生の精神的なものを、技を通して教えていただいているのである。

したがって、合気道の指導者はこのことを常日頃から念頭において指導にあたるべきであらう。(平成一七年三月浜田 著) 旅シリーズを前回に引き続き連載させていただきます。

小京都ともいわれる風情のある「飛騨高山」を後にして夕方のバスで一路平湯温泉へ。この温泉は岐阜県内でも東の端に位置しており、景勝地「上高地」が近年利用者の増大によるマイカー規制のため、長野県側の沢渡温泉とともに、シャトルバスによる上高地入山口としてハイカー等がいで湯でゆっくりする場所として知られている。

最近では途中の道も整備され、高山市街地から一気に標高一二四〇mの平湯まで約一時間で到着することができ、ここまで来ると下界の猛暑がうそのようである。

今日はここで一泊して明日早朝に上高地入りである。ちなみに小生の一人旅は「安全第一、またなるべく格安に」という思いから上高地という一大観光地の高い旅館代を節約する意味からも今回ここでの前泊行程とした。

テレビ放送では、遅かった中部地方の梅雨も今日明けたとかで、温泉につかって早めの就寝である。翌七月三十一日、途中平成九年に完成した延長約四kmの安房トンネルを通り、わずか二十分で上高地のバスターミナルに到着。

かなり以前に一度来た時は曲がりくねった狭い道

を上ってきた記憶があり、隔世の感がある。

しかし、車中左手に見える、焼岳が大正四年に噴火した時にその堆積物でできたという大正池の湖面に立ち枯れた樹木が林立している幽玄な景観は、昔と変わっていない。

今日は、上高地を拠点にして徳沢の少し上流部の新村橋までの往復約六時間のトレッキングである。まずは上高地で最も人気の高い梓川にかかる河童橋まで行き、穂高の峰々をバックにして歩く前の準備体操である。\*以下、次号へ



梓川からの穂高遠望